

会 議 録

会 議 の 名 称	令和8年度 第1回 日向市図書館複合施設整備アドバイザー会議
開 催 日 時	令和8年7月7日（火曜日） 15：00～16：50
開 催 場 所	日向市役所2階災害対策本部室
出 席 者	<アドバイザー> ・桑野 斉 国立大学法人宮崎大学 地域資源創成学部 教授 ・尾野 薫 国立大学法人宮崎大学 地域資源創成学部 講師 ・山田 あすか 学校法人東京電機大学 未来科学部 教授 ・吉成 信夫 学校法人中部学院大学 大学・短期大学部 客員教授 （欠席）文教大学 人間科学部 青山鉄兵 教授 <事務局> ・総合政策部 長山 ・総合政策課 寺尾、押川、一木、野村、高木 ・市立図書館 海野、貴田 <オブザーバー> ・アカデミック・リソース・ガイド株式会社（オンライン） ・有限会社マル・アーキテクチャ（オンライン）
議 題	1 アドバイザリー会議について 2 これまでの経緯 （1）検討体制・基本構想について （2）市民共創の取組について （3）「日向市図書館複合施設整備基本計画」策定作業の進捗状況について 3 協議事項 居心地のよさの実現について 4 今後の予定
会議資料の名称 及 び 内 容	・第1回日向市図書館複合施設整備アドバイザー会議説明資料
記 録 方 法	☐ 全文記録 ☐ 発言者の発言内容ごとの要点記録 ☒ 会議内容の要点記録
会 議 内 容	
開会 1. これまでの経緯 資料に基づき事務局より説明。 2. 協議事項 居心地のよさの実現について 主な検討論点として、①居心地のよさを空間と運営の両面からどう実現するか、②読書機能と多様な過ごし方をどう両立させるか、③中心市街地や周辺施設との連携をどう図るか、④基本計画で優先的に決定すべき事項は何か、の4点を示した。	

桑 野：昨年度からの議論を踏まえると、今回の対象は単なる図書館ではなく、複数機能を持つ複合型施設である。ただし、公共施設の複合化は、建物が集約されただけ、各機能が並列に存在するだけになりやすい。行政の縦割りによる「専門性の高い使いやすさ」と、市民が求める「自由に使える使いやすさ」は一致しないことが多く、そのズレが居心地の悪さにつながる。

新しい図書館複合施設を「行政が政策を進めるための施設」として捉えるのか、「市民が柔軟に使える施設」として捉えるのか、明確にする必要がある。行政・市民・議会の考え方がずれると、従来型へ押し戻される可能性もあるため、三者が離れない進め方が重要である。

尾 野：「居心地のよさ」は重要な論点だが、明確な指標が定まっていない。国土交通省などが示す居心地のよさの指標は都市型に偏っており、宮崎や日向の実情に合わない可能性がある。

また、「人に会うこと」自体が負担にならない空間づくりや可変性も求められる。そして、居心地のよさは単体施設内に閉じず、中心市街地全体や庁舎との一体性まで含めて考えるべきである。さらに、気候変動の時代のいま、防災・減災の視点は不可欠であり、浸水や内水氾濫も踏まえた評価軸の整備が必要である。そのため、今後は居心地のよさや都市空間の質だけでなく、防災に関する評価指標も必要になる可能性がある。

吉 成：「居心地のよさ」は、新しい図書館を整備し、家具や什器、空間を新しくすれば一定程度は確保できるものである。しかし、それだけでは不十分であり、最も重要なのは「人」である。

利用者が「やらされている」と感じないことも大切である。与えられたものに対して、人は居心地のよさを感じにくい。一方で、自分の意見が反映された、自分も関わったという実感があると、人は「もう少し関わってみよう」と思い始める。

したがって、行政が主導して整える部分と、市民の動きを待ち、受け止める部分の両方が必要である。岐阜市の「みんなの森 ぎふメディアコスモス」でも、利用者が自然に「メディコス」と呼び始めたことで、施設への親しみや愛着が育っていった。愛着は自然発生的に生まれるものである。

また、読書支援を考えるうえで大事なことは、実際には月に0冊から2冊しか本を読まない人が大多数であり、図書館を頻繁に使う人は少数派だという現実である。そのため、図書館が従来どおり、本をよく読む一部の人だけにに向けた読書支援に偏りすぎていないかを問い直す必要がある。むしろ、本にあまり親しんでいない90%の人たちにどう目を向けるかが、これからの図書館には求められるのではないかと、という問題意識である。

地域の特性も重要である。人口の少ない地域では、しがらみが強く、特に若い世代にとっては日常的な人間関係から距離を取りたくなることがある。その意味で、図書館には「姿を消す自由」を保障する機能が必要である。

最後に、「読者のスタイルをどう変えるか」という意識も必要不可欠である。本に関心がない子どもに対して読書への入口を広げるためにも、資料構成自体を工夫していく必要がある。

山 田：事前資料では「居場所」と「居心地」が明確に区別されずに用いられている印象があった。

建築の観点から整理する場合、「居心地」は「居場所における心地」と捉えられるため、今回は「居場所」という概念を軸に整理する。

「居場所」には少なくとも3つの意味がある。1つ目は、身の置きどころとしての居場所。これは快適性、音環境、座席の種類や配置などに関わる。どのような場を選べるかは、身体の大

きさ、他者との距離感、疲労の有無、目的、滞在時間などと密接に関係する。

2つ目は、社会的帰属先としての居場所である。社会的帰属を生むうえでは活動が見えることが重要である。本以外にも立ち寄りきかけがあれば、人が自然に訪れ、そのまま居着くことができる。その過程で、自ら居場所をつくることが可能になる。

3つ目は、アジールとしての居場所である。これは必ずしも積極的な活動や役割を伴うものではなく、「ここにいてよい」と感じられる逃げ場、排除されない場を指す。特に目的がなくとも、匿名的な存在としてそこにいられることが重要である。

この3つの層は、利用者ごとに明確に分かれるのではなく、相互に混ざり合う。同一人物のなかでも、状況によって求める居場所の意味は変化する。したがって「居心地のよさ」とは、単なる快適性にとどまらず、複数の意味を帯びた居場所のなかで、その場にいられること、存在したいと思えることとして捉えるべきである。これが建築の観点からの整理である。

ここで重要になるのが余白である。余白は、先ほどの3つの層をつなぐ要素として大きな意味を持つ。ドイツの多世代の家「メアゲネラツォネンハウス」の事例では、地域社会のなかにおける開かれた集いの場としての余白が中核にある。その余白に人が集まり、そこからボランティア活動、学習支援、福祉との接続といった機能が立ち上がる。この点は、これまでの議論で示されていた方向性とかなり近いと感じる。すなわち、先に機能を置くのではなく、余白を通じて人や関係性が集まり、その結果として機能が生まれる構造である。

建築的に整理すると、複合施設のあり方にはいくつかの型がある。

- ①各機能が単純に並置され、くっついている型
- ②図書館のなかに多様な機能を内包する型
- ③図書館自体が廊下やロビーのように機能し、各機能をつなぐ媒介となる型

この違いは空間構成だけでなく、施設の機能や位置づけにも当てはまる。したがって、「居心地」や「活動」といった抽象的な議論だけでなく、そもそもどのような運営スタイルで多機能を編み直すのかを明確にする必要がある。最終的な論点は、これを「図書館」として構想するのか、それとも「図書館を含む複合施設」であり、必ずしも図書館そのものではないものとして構想するのか、という点にある。ここは今後の検討における大きな分岐点である。

事務局：ここからは相互に意見交換を行い、論点を深めたい。

吉 成：図書館や公共施設は、世代や機能ごとに分かれすぎている現状がある。運営上は分けた方が扱いやすいが、人が面白さや自分ごととしての実感を得るのは、むしろ異なる人や機能が「混ざり合う」場である。メディアコスモスでは、図書館を核に多様な世代や活動が交わることで、化学変化のような新しい価値が生まれていた。

桑 野：山田先生が示した図書館の類型①～③について、吉成先生の実践はどれに近いのか。

吉 成：③のような「つなぎとしての図書館」に近い。空間の中に書籍、展示、対話の場などがあるが、個室に分かれているわけではなく、広場のように機能していた。行政上は複数の課に分かれていても、市民から見れば全体が一つの図書館として認識されていた。しかし、運営面の難易度が高い。メディアコスモスでも、当初は課ごとに分かれ、同じ施設でありながら融合していなかった。

桑 野：複合施設を機能させるには、人的資源や活動をつなぐプロデューサー的役割が必要なのか。

吉 成：一人の担当者が担うべきか、仕組みとして持つべきかは別として、コーディネーション機能は不可欠である。課や部が異なっているとしても、共同プロジェクトを組み、来館者ヒアリングや分析を一緒に行うなど、実践を共有することが重要である。表面的な連携ではなく、実際に「一緒にやる」経験の積み重ねが融合を生む。

桑 野：従来の図書館利用者は、いわば「学校の優等生」層に偏りがちである。そうではない子どもや市民の声をどう拾い、参加型の図書館づくりに生かしていたのか。

吉 成：不登校を含む10代には行き場が少なく、匿名でも立ち寄れる仕掛けが必要である。メディアコスモスでは、ヤングアダルトコーナーに「心の叫びを聞く掲示板」を設置し、悩みや喜びを匿名で投稿できる仕組みをつくった。11年で2,000通以上の投稿が集まり、その多くは日々の悩みや人間関係に関するものであった。これにより、従来見えなかったニーズや潜在層の存在が把握でき、新たな取組も生まれた。それでも図書館にこない層はなお存在するが、書き込まなくても掲示板を読んでいる子はいる。そのような潜在的な層に触れられる意義は大きい。

山 田：潜在層に触れることの重要性に同意する。図書館の利用者や図書館好きだけを前提に施設をつくっても、利用者は増えない。インタビューやワークショップを実施する際も、現利用者だけを対象にしては限界がある。使っていない人には、利用したくても障壁があるのか、そもそも求めるものが変化しているのか、本や空間との関わり方が異なるのかを探る必要がある。その上で、既存の主流ではない「じゃない方」、すなわちオルタナティブな層にこそ大きな可能性があり、その層をどう発見し、呼び込み、育てるかが、複合的な居場所づくりでは重要である。

尾 野：「広場的な図書館」をイメージしており、ベースに広場があって、その中に図書館を含む複数の機能が入る形を想定している。今回考えるべきものは「図書館らしい図書館」ではなく、「図書館ではない図書館」に近いと考える。また、子どもを図書館に連れて行くことが難しかった経験があり、子育て世代にとっても従来型図書館には利用障壁があると感じる。さらに、学生にとっては電子書籍やSNS上のつながりも読書や交流として成立しており、リアル空間とデジタル空間が混ざる時代に、図書館が紙中心の枠組みだけでは捉えきれなくなっている。運営面でも、分野横断型の新たな組織体制が必要。

桑 野：「アジールとしての図書館」は空間設計によって実現するのか、運営やソフトによって実現するのか。

山 田：両方が必要。少し暗がりのある場所、人目につきにくい椅子、読書や勉強のための小さなブースなど、空間的な逃げ場はアジールとなり得る。一方で、人の気配がまったくない場所ではなく、誰かの気配がありつつ守られている距離感が重要であり、その調整は運営と一体で考える必要がある。また、アジール性とは「意味がなくてもよい」「目的がなくてもよい」「選べること」であり、自分に合った逃げ場所を選択できることが重要である。

吉 成：「選べること」は重要。選べなければ自分ごとにはならず、主体的な居場所にもならない。

尾 野：空間を作り込みすぎると、かえって使われなくなる。利用者が自ら居場所を見つけ、確保できる余白が必要であり、参加しながら選べる空間こそ重要である。

山 田：公共空間でも、椅子を動かせるかどうかで性格が大きく変わる。家具やテーブルを利用者自身がカスタマイズできる状態は、居場所づくりに大きく関わる。

吉 成：明石市立図書館では、館内の椅子を自由に動かしてよいと明示しており、日常的に家具が動いている。こうした自由度があることで、利用者に「ここは自分の場所である」という感覚が生まれる。

山 田：自分で手を入れることで自分の場所になるという、いわば「巣作り」の感覚が重要である。クッションや靴を脱げる場所なども、その感覚を支える要素になる。

また、尾野先生の話にあった「広場をベースに機能が混ざるイメージ」については、「図書館」という文字自体が背景に溶けて見えなくなるような施設が望ましい。廊下やロビーにも自然に本があり、図書館とそれ以外の境界が曖昧になる状態が理想である。一方で、図書館法上の制度的制約の中では、その実現には限界もあるかもしれない。

桑 野：本日の議論は非常に有意義であった。今後はアドバイザーだけでなく、行政実務を担う職員も議論のテーブルに入るとよいのではないか。

尾 野：図書館部門だけでなく、子育て支援課など関係部署も参加した方がよい。

事務局：本日の内容は庁内検討委員会でも報告する。次回は関係部署の参加も含めて検討したい。行政だけでは気づけない論点が多く、他部署にもこの議論に加わってもらいたい。

3. 今後のスケジュール

事務局より説明。

閉会